

Remodelling of femoral head-neck junction in slipped capital femoral epiphysis : a multicentre study

秋山, 美緒

<https://doi.org/10.15017/1441095>

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

論文審査の結果の要旨

大腿骨頭すべり症 (Slipped capital femoral epiphysis; SCFE) は、学童期に好発し、大腿骨の骨端核が頸部より後下方にすべる疾患で、変形が残存すると将来変形性股関節症への進展が危惧される。成長に伴いリモデリングを受け変形が改善されることが知られているが、その変形が残存し大腿骨・臼蓋インピンジメント (大腿骨頸部前方が張り出し臼蓋前縁と衝突する病態; Cam-type変形) を残す症例も少なくない。本研究では安定型SCFE症例56症例69関節の股関節レントゲン画像を用い、SCFE後のCam-type変形を評価した。対照群として片側性一過性股関節炎患児の健側42関節を用いた。SCFE後のCam-type変形は、手術直後62.3% (69関節中43関節) に認め、最終観察時には29.4% (69関節中20関節) と有意に減少した ($P < 0.0001$)。どちらの時期も対照群に比べ有意に高率であった。(2.4%; 42関節中1症例; $P < 0.0001$, $P = 0.0119$) Cam-type変形遺残に影響を与える因子は発症年齢・すべり角であり、年齢が高いほど、そしてすべりの程度が大きいほど遺残する傾向にあった。SCFEではリモデリングにより頸部の張り出しは改善するものの、依然として約3割もの症例でCam-type変形が遺残し、大腿骨・臼蓋インピンジメントが発生しやすい状況であることが明らかになった。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員により専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項につき種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。